
イギリスの国民と文学

北 澤 義 弘

このエッセイはイギリス文学を嗜んでいるうちにたまたま気になったその中の一つの傾向を取りあげて例証してみたいと言う単純な興味に唆かされて書かれたものである。ところがいざ着手してみると早速困ったのが「イギリス文学」の定義である。「文学」はともかく、難しいのは「イギリス」の説明である。

地理学上からはグレート・ブリテンと言えはイングランド、ウェールズ、スコットランドとその周囲の諸島を指すのであるが、狭義にとれば「大ブリテン島」の本島だけを指している。そこを現在のイギリスと呼ぶことにする。その住人を現在のイギリス人と言ってもよからう。彼らは今では英語を話す人達である。ただし^{イングランド}Englandは^{アングルランド}Angle-landであり、^{ブリテン}Britainは古代ローマの属州名Britanniaのことで、本来Briton人と言うブリテン本島南部に居住していたケルト人の国を指している。この様な次第なのでイギリスの定義のしにくさは判るであろう。この複雑さがあの難しい民族と文化を育んだのであるから、当論においては何と言ってもこの構成民族の問題を整理しなければならない。ついでのこと故ここでは人間出現の段階から順次その生成展開の模様をたどってゆく。近年人類学、民族学、考古学、古生物学、地質学その他の学問が科学の多方面にわたる進歩に伴って急速な発展を遂げているのは周知の事実である。それらを基にした総合的な知識から以下の様な考え方を得たのである。

人類の文化形成

地質学上の区分として24億年前の前カンブリア紀 Antécambrienne に続いて古生代，中世代，第三紀，第四紀が設定されているが，人類が出現したのはこの第四紀 Quaternary の更新世 Pleistocene 氷河期の最中であった。第四紀は実に古生動物と現生動物交替の時にも当たっている。この紀のうちに四回あった氷河期の第二間氷期にはネアンデルタール Neanderthaloid という¹⁾ 亜人類がユーラシア大陸 Eurasia に現われている。彼らは既に石器を製作していたのでここから紀元前 1 万年までを旧石器時代 Paléolithic と呼んでいる。この時代を更に文化史上から前，中，後期に分ける。それらはそれぞれ固有の文化相を持っていた。人類学のテキストに従ってその名称を列挙すれば次の表となる。

I 前期旧石器時代 Paléolithic inferior 前50万から前10万年まで	
(a)	シェレアン Chellean 又はアッブヴィリアン Abbevillian 前50万年以上，礫石器。
(b)	クラクトニアン Clactonian 前45万年 イギリス，ロンドンの北東 Harwich で最初に発見された石器の名による。
(c)	アシュレアン Acheulean
II 中期旧石器時代 P. moyen	
(a)	ルヴァロワジアン Levalloisian 及びムステリアン Mousterian, ²⁾ 第三間氷期，前12万年，パリの近くで発見。
III 後期旧石器時代 P. superior	
(a)	オーリニャシアン Aurignacian, ³⁾ 前 3 万年，クローマニヨン時代，骨の使用混る，象牙製女性像。
(b)	ソリュートレアン Solutrean, 前 2 万年
(c)	マグダレニアン Magdalenian, 前 1 万 5 千年，骨器発達，アルタミラの

洞窟画。

- (d) アジーリアン Azilian, フランスのピレネー山中の洞窟名, 中石器時代に続く。

ヴェルム氷河 Würm の後退し始めたあとユーラシア大陸は温暖化が進んできた。紀元前1万年の頃である。ホモ・サピエンス・フォッシリス *Homo Sapiens fossilis* (クローマニヨン Cro-Magnon を含む) に続きこの頃からホモ・サピエンス・サピエンス *Homo Sapiens Sapiens* である現代人, 即ち新人が出現した。そして人類はマグダレニアン文化の技術を受けついでいた。

新人による中石器時代 Mesolithic Age が次に来る。前石器文化を受け, さらに細かい道具類, 角器, 銛, 武器を作り, 磨製の技術も加えたが, 土器の使用はまだ行われていない。

新石器時代 Neolithic Age になるともはや人は洞窟を出て野外にキャンプを設営し, 次第に農耕牧畜生活に移行して来た。この時代からは史前学の領域に入ってゆく。土器や金属の文化が急速に人類の間に広がってゆく。これからは我々の興味は民族と文化の伝播に移る。文化遺産と言語の解明は民族の推移を知る重要な手掛りとなってくる。

我ら新人類が現われるやたちまちその頭脳は現代人に比適する能力を発揮し, 人間独特の文化の発展を進めている。その後は僅か1万年も経ぬ内に現在の超人的文明に到達しているので, これはイギリス民族に達するのに決して迂遠なる議論ではない。後期旧石器時代のオーリニャック, ペリゴルディアン, ユートレアン及びマグダレニアン即ち *P. superior* 文化は既に現代文化のあらゆる面に深くかかわっている。そしてそれらをも人の文化史の起源に取り込むのが論者の意図なのである。

前3万年前からのオーリニャック文化は造形芸術に特色を見せている。動物像やヴィーナス像がヨーロッパ各地より出土し, 宗教的な匂いを感じさせる。1万年前頃にはマグダレニアン文化は中央アジアからヨーロッパ全域に

拡がり、石器、骨器の種類のみならず、その文様や技巧にも著しい進歩と思想的な表現と思われるものさえ出現している。スペインのアルタミラ Altamira やフランスのラスコー洞窟 Lascaux Cave の絵画からは宗教或いは思想的表現がかなり汲みとれる。

中近東からヨーロッパへ文明の伝播

レバノン、シリア、ヨルダン、イスラエル等地中海東岸のレバント Levant 地方は原種大麦、小麦の産地であり、したがって前1万5000年以降前8000年頃まで農牧を中心とする文化が開けた。地球の温暖化が進みはじめた頃で、これを中石器文化 Natufian と言う。それはイランのザグロス山地 the Zagros Mountains、トルコのアナトリア Anatolia 高原まで及んで行った。この時代から西欧人類の文化が発生したのではないかと考えられている。前6000年頃には石器、骨器のほか鉛、銅の金属や土器、漆喰なども生活に取り入れられていた。農耕牧畜により、人は定住化し、村落が形成されて来た。ザグロス山地では彩文土器文化が生まれ、ハッスーナ Hassuna と言われる中期新石器時代の文化を持つに至った。これはチグリス川の上流に当る。この農耕民はやがて山を下り、チグリス、ユーフラテス川流域に拡がってゆく。作物は大小麦類、豆類、亜麻などであり、灌漑も行われるようになっていた。農作、建築、土器類の技術が進歩してきた。サマラ Samarra 期文化である。次いでメソポタミア北部からトルコに至るハラフ様式文化の時期が来る。土器の様式にも独特の幾何模様の彩文が描かれるのである。前5000年になるとユーフラテス川下流にウバイド Ubaid 期の文化が興る。メソポタミアの沖積地では川や湿地に灌漑などを用いた高度な文化発達の跡が見られる。宗教も興り、前3000年にはチグリス、ユーフラテス川一帯にまで拡がって行った。神殿、葦舟、土器の文明が充実して来た。人間の文化と言うものは人類の生理上の頭脳発達が段階的になされるのではなく、次々に遭遇する新しい環境に

応じてその固有の能力が啓発されて新しい創意工夫を加え、それらの蓄積によって前進してゆくものと思われる。それは別の文化と出会うことにより加速を増してゆく。

メソポタミヤの東、イランのスサ Susa を中心にもう一つの土器文化が栄えていた。更にウバイド Ubaid 文化がユーフラテス川畔のワルカ Warka, ウル⁴⁾Urの遺跡に見られる。前4000年から3000年紀にわたってウルク文化⁵⁾が興り、ワルカ Warka には大きな「白の神殿」が構築された。それはジグラット Ziggurat という高い基壇を伴い、既にシュメール Sumer 文明に現われる神殿の萌芽を形造っている。またここに発見された円筒形印章 cylinder seal は古代文明の神話や生活を知る重要な手掛りを与えてくれる。ジェムデト・ナスルやカファジェーの地がウルについて文化の中心となり、前3100～2900年代を飾っている。このシュメールの美術は古代人類文明の完成形であり、ペルシャを経て遠く西洋から東洋にまで影響を及ぼしている。土器類の様子は当時の思想や実生活を具体的に物語っており、物語りも中国、印度を通り、日本に及んでいるのは興味深い。

1万年 B.C.にはユーラシア大陸は後氷河期に入り、地質時代は洪積世から沖積世に移った。それから地球は千年単位ほどで気候の変動を経ながら温暖化して行ったのである。氷河期には厚い氷河がスカンジナビアやブリテン諸島を覆い、一帯は広い地続きであった。融氷により海面が上昇し、中には古代の遺跡で海中に没するものもあった。

大陸の中緯度以北はステップ草原が消え、温暖化により森林が生い繁り、草食獣が減少していった。後期旧石器時代の狩猟生活は森林を利用する多様性をもった食文化へと移向して行った。季節に左右される採食は人々に移動生活を促した。紀元前7000年から6000年頃になると、南西アジアからバルカンに伝わった農作物は北上して黒海沿岸からドナウ川沿いに伝播し、人々は農牧化による定住生活をするようになった。バルカンではこの頃銅を使用することも出来るようになり、これはギリシャ芸術品の素材となる。また神々

を表現しているらしい土偶の出土も多く、その神々はギリシャ神話の原型をなしているとも考えられている。

前5000年紀になると西地中海の南フランス方面にはシャッセイ文化が広がった。農牧も行われたが、そこには独特の形態のシャッセイ型土器が普及した。死者の埋葬法も石室を岩山にくりぬき、大勢の死者を集めて葬るようになった。やがてそれらの文化はブリテン諸島にも伝わり、アイルランド、スコットランド、オークニー諸島にも流れて行った。こうして西ヨーロッパには北の中央道と南の地中海の両ルートから文化は西進して行った。前4000年紀から3000年紀にかけてフランス、ブリテン、スペインに今も残る巨石建造物が造られたらしい。これは当時の何らかの宗教上の表現と考えられている。

前6000年紀にはバルカン方面で銅が素材に用いられはじめたことは既に述べたが前5000ないし4000年紀には銅の冶金術が実用化されていた。前4000年紀には農牧がヨーロッパ全域に広がり、ドナウ川沿いやゲルマン地域の採集狩猟生活は終焉を告げた。

前3000年紀も末に近付くと銅と錫の合金である青銅器が実用化された。中、北部ヨーロッパの森林は開拓され、農牧には牛の飼育も行われるようになった。前3000年から1100年にかけてエーゲ海方面に本格的文明が開花することになる。これがミノア Minoan 文明である。一方ヨーロッパ内陸でも民族の移動により金属使用が普及し、ブリテン島にも青銅の器や武器が伝播した。そこにストーンヘンジが建ったのもこの頃である。またケルト族やゲルマン族が西アジアのスラヴ、スキタイ族と交流して青銅、鉄、馬などを西ヨーロッパに伝えたと考えられている。スキタイ人達の遙か東にはまた同じように知的発展を遂げたモンゴロイド他幾多の人種がそれぞれの文化を時を同じくして進めていた。人類の持つ同種間の牽引性により洋の東西はつねに何らかの文化の疎通が行われていた。

さて人類は地球上に拡散して行ったが、時代を経るに従い地域性がそれぞれの集団に個性を持たせた。それが民族を形成し、文化や言語を異にさせる

ようになった。つぎにヨーロッパの民族と文化形成の軌跡をたどってみる。

流動する民族と文化

前述の人類学、考古学的考察の資料は総て物質的な遺物の整理分類から推測した結果である。その様な人類や文化は、骨の化石や石器、土器、骨器、金属などの装飾物の断片、破片などにより充分にまた確実に推論することが出来る。しかしそれを使った人や生活を再現することは難しい。それについては彼らの語り合った言語、遺した記号文字の解説、死者の埋葬の様式、それから今だに世界の偶々に残る口碑、神話、伝説を頼りに丹念な追求を続ける言語学、民族学、神話学、民族説話の研究者の成果に俟つほかはない。

前1万2000年頃におけるナイル川上流ルクソール Luxor の南イスナ Isna の人間文化の跡が見付かっているが、その後レヴァント地方に生まれて更に進んだ農耕を行った人々の住居跡があり、これが人の文化の始まりであろうと考えられている。即ち前述のナトゥフ文化である。イエリコ Jericho がその中心であった。そこには遠くトルコのアナトリア Anatolia 山地からの黒耀石などがもたらされていたことからアナトリアにも何らかの文化を持った人が居たことになる。またイラン南部から北イラクにかけてザグロス文化も成長しはじめていた。それらの文化の芽は前6000年紀になると一層成育を促進して古代シュメール文化の基となってゆくのである。前7000年紀から6000年紀にわたる麦類の南東ヨーロッパへの伝播の源はアナトリアと考えられていることは先にも述べた。ヨーロッパの中央の門戸バルカン半島には既に北からの狩猟牧畜民族が侵入していたが彼らはインド・ヨーロッパ系の原種族であった。事実前3000年から1000年にかけてバルカン経由のヒッタイト Hittite 人、フリギア人又はフルリ Hurrian 人がアナトリアに続々と移動して来ており、ペルシャには東から同系のインド・イラン Indo-Iranian 語族(古代イラン人)の侵入が行われた。前2000年紀はインド・ヨーロッパ語族の大

移動期になっていた。ヒッタイト人はアナトリアにヒッタイト古王国を、東メソポタミアにカッシイト人のカッシイト Kassites 国、北メソポタミアにフルリ人のミタンニ Mitanni 王国を建てている。ヒッタイト人もカッシイト人もバビロンを攻めて前1531年にはこれを滅し、以後4世紀にわたって小アジア、メソポタミアを支配した。

旧約聖書のヘテ Hitti 人で知られる以外あまり知られていなかったヒッタイト人とは如何なる種族かということが我々に明らかになったのは最近のことである。これは1906年トルコのアンカラから出土した粘土板にある象形文字、楔形文字をチェコのプロズニーという言語学者が1915年に解読したことに始まった⁶⁾。彼はその記号の一節を次の様に解読した。「いまや汝はパンを食べ、さらに水を飲むであろう。」そしてこれはまさしくインド・ヨーロッパ語であることを証明したのである。この時代の解明を契機としてオリエント史及び古代文明史に急速な発展が見られた。それは人文系の学界、特に説話文学、伝承文学に極めて根本的な説明をもたらす発見である。

ゲルマン民族

そこで目をヨーロッパ大陸に転ずる。前1万年頃には第四氷河期の支配下にあった氷河も後退を始め、前9000年頃にはブリテン諸島、デンマーク、バルト海沿岸あたりまで原始の頃の新人達が放浪していた。狩猟漁労生活をしており、別の仲間も大陸の各地に小集団を造って暮っていた。彼らはもともと中央アジアあたりから後期旧石器時代に分かれて大陸に分散したコーカソイド系の人々と考えられている。したがって言語は印欧語の分派語であったと思われるがまだ不明の部分の方が多い。彼等は永い間に北方生活に適応する体形を獲得しはじめていた。その人類学的特徴はタキトウスの「ゲルマニア」によれば毛髪はブロンドで膚白く、碧眼、体軀大きく長頭、鼻柱長大とされている。特に鼻腔は長い距離を通すことにより冷い空気を温める効果が

ある。彼ら人間にもベルクマン、アレン、グローガ、トムソン・バクストンなどの動物学上の法則⁷⁾が作用していた。やがて彼らは部族の連繫を保ちながら北欧、東欧へと千年単位の時をかけて移動し民族を形成していった。

まだ穀物を知らないこの北方の人々は狩猟や木の実採集のため定住することが少なく、したがって文化的には社会を造った南方に文化的な遅れをとった。しかし彼らには森林や草原があり、これらの活用が彼らの頭脳の優秀性を表わしている。或る意味では、中近東アジアの様な人間社会の煩わしさを負わない人間の率直で個性的な生活を楽しんだ種族と言えよう。中、新石器時代のコーケイジアン Caucasian がドナウ川を東南部から西北部に進行してバルト海沿いに浸透し、更に西進してブリテン島にまで到達する。大陸を移動していたゲルマン人の生活の大部分は森と山と沼地であった。農業は低地だけで行われた。畑作は土地の交替を必要とした。放牧も兼ねていたので長年月定着することもなかった。

西暦紀元前後2、3世紀にわたりゲルマン人は部族またはゆるい部族結合をなしていた。彼らは大きく区分して北、東、西に分けて考えられる。北はスカンジナビヤ、スウェーデン、デンマーク、アイスランドに向かい東は黒海方面に移動したゴート族。西はドイツ人とアングロ・サクソン人の祖先で、彼らはローマ撤退後のブリテン島に渡った部族である。ゲルマン人達は民族的な固い結束と言うより、同一言語と同一神話、共通の生活体験のもとに他民族に対しては同族という意識をもっていた。彼らの神話、信仰は遠い祖先の昔から伝えられて来たもので、学問的に系統づければインド・ヨーロッパ系に属するものである。ラテン、ギリシャ、ケルト、スラヴの伝承と同根のインド・ヨーロッパ系の物語りと言える。ただそれらは南に栄えた古代文化からは遠く離れた北辺の地にあった故に独自の神話の古い姿を残し得た。南方の農耕文化による都市社会に築かれたような神の座を考えつかぬこの自然人間達は森や河海に彼らの神の住居^{すまい}を見た。したがって彼らの宇宙観や神の概念は壮大で厳粛なものであり、素朴で情熱的、身近なものでもあった。千

古の森は神の座であり生活の源泉でもあった。口碑であったため失われた部分も多いが、幸いアイスランドに移ったノルウェーの貴族が「エッダ」Eddaを保存し、部分的には南欧や中部ヨーロッパの地方に記録として残存しているものもある。アングロ・サクソンが古英語で残したベオウルフ Beowulf はゲルマン民族の英雄叙事詩の最古の資料ではあるが、詩人 scop 達はキリスト教の聖職者でもあることから、この異教の物語りをキリスト教義に符合させようとする意図が露骨に現われている。それだけ逆に説話の大部分はその本質を素朴に表現している。如何にキリスト教に順化させた作品でも至る所でゲルマン的な本質、異教的な体質があらわになっている。

ケルト民族

イギリス文化のもう一つの伏流として重要な民族がケルトである。前述の如くゲルマン、ローマなどよりはるか以前からブリテン諸島を支配していた人々であり、征服されてしまった後も陰に陽にその姿を見せているのである。それどころか文化に行きづまって来た現代では彼らケルト系諸族は文学においても将来にむけて盛んに自己を主張しはじめているし、し続けると思われる⁸⁾。故に当論においてもその民族の由来を知っておかなければならない。

ケルト人はヨーロッパ中部、西部に旧石器時代から居住していた原ヨーロッパ人で、ギリシャ、ローマ人の記録では長身、金髪、碧眼又は灰色眼となっているが、実はもっとラテン系に近い膚色や体軀も多いので、ヨーロッパの南帯、北帯の中間帯を占めた混血種、あるいは民族形成前の人々の原種的存在と考えた方がよい。中央アジアで言う匈奴の様な存在である。ブリテン島には既に氷河期の5万年前から新人類の痕跡があり、その後もウインドミル・ヒル Windmill Hill 文化の人、ずっと下って青銅器、巨石文化の人々の隆替があった。500年 B. C.にはハルシュタット Hallstatt 文化、ついで前3世紀のラ・テーヌ La Tène 文化、紀元前後にはゲルマン文化を持ったベルガエ

Belgae 人がベルギーから農器具の犁をもって入植して来た。これまでブリテン島、アイルランドに来ていた人々は皆ケルト人と言うことが出来る。彼らは人種上ではなく、印欧語系の言語、生活慣習、宗教神話などを共有することに共感していた人達と言える。彼らの起源は考古学上は前3000年紀であり、その後1000年の間、南ドイツとオーストリア、ハンガリーの間のドナウ川沿いにいた墳火葬の慣習を得た。焼いた死者の骨を壺に納めたので骨壺 cinerary urn 文化と呼ばれている。このアルプス北部の農牧骨壺文化の主人公がケルト人である。前1300年頃であった。彼らは恐らくその東隣りのスラヴ Slav やスキタイ Skythai と直接接触する機会があったであろう。彼らは鉄と馬の知識を東方のスキタイ人に学んだのであった。

ブリテン島、アイルランドにケルト人が到来した時期は段階的である。先ず前2000年紀のビーカー文化 Beaker culture, 次いで戦斧文化や新石器文化を伴った入植、前8世紀のアルプス北面からの骨壺葬文化のブリテン南部地帯への入植と続いた。彼らは鉄器を持ってイングランドの中部、ウェールズ地方に拡がった。次いでラ・テーヌ文化を携えたケルトがフランス中部からヨークシャ、スコットランド方面に、最後に南東部にライン川からのベルガエ族という順であった。アイルランド島にも同様のケルトの入植が行われたが、その他にもガリアやローマから迫害を逃れて渡来した人達もあった。彼らはゲール語 Gaelic を用いていた。このアイルランドの方が後のローマ帝国の支配を受けなかったのが古来のケルトをよく残している。その文学は口伝であった故に正確に伝えられ、7、8世紀に到ってはじめて書き留められて古代ヨーロッパ文化の貴重な資料となっている。

イギリスの歴史時代

以上でブリテン島やその周辺を廻る民族の素性を年代的、地域的に概観したことになる。さて記録に残るブリテンの歴史はどうなっているであろうか。

イギリスの人種的過去はこの国の文化に複雑な相を与えている。45万年前この国土に前期旧石器人 Lower Paleolithic が居住して以来、ストーンヘンジやバロウを築いた先人、近くは前項であげたケルト以後の諸民族の混合と融合がこの国を独特なものにしている。D. H. Lawrence が「アーロンの杖」*Aaron's Rod* の冒頭でいみじくもそれを次の如く表現している。

It is remarkable how many odd or extraordinary people there are in England. We hear continual complaints of the stodgy dullness of the English. It would be quite as just to complain of their freakish, unusual characters. Only *en masse* the metal is all Britannia.

ヨーロッパ人の原種として東南ヨーロッパに出現したケルト人とゲルマン人とが廻り廻ってこのブリテン島にたどり着き、地中海文化の華やかさを他所に、ひっそりと西北ヨーロッパに根を下して来た。

このケルト人だけの島に紀元前後に侵略して来たローマ人は本島の南東部を蚕食し、以来5世紀まで支配を続けた。ウェールズ地方やスコットランド国境まで攻め入り、その境に長城を築き、軍道や保壘など設営し、ロンドンを中心にキリスト教やローマ文化の浸透を図ったが、3世紀頃からその権力が弱まって来た。それにつけ込んでサクソン人がブリテン島の東に上陸を開始、やがて北部にピクト人、スコット人、南東部からはサクソン人、続いてジュート、サクソン、アングル人と矢つぎばやにゲルマン民族が入ってきた。430年 A. D.にはローマ軍は完全に引きあげた。したがってその後1, 2世紀はこの島ではケルト系やゲルマン系が入り乱れて領地を争った。6世紀になると勢力分野が定まり、所謂ヘプターキ heptarchy の支配体制が整った。7世紀前半は北のノーサンブリア、8世紀はマーシア、9世紀はウェセックスのエグバート王が全イングランドに覇を唱えた。この頃から北方民族のデーン人の入寇が猖獗をきわめウェセックスのアルフレッドの防戦もかなわず、

東部にデーンロー Dane・lagh をしいて北東部に彼らを受け入れた。Alfredの子 Edward はマーシアを併合、ついでその子エセルスタン Ethelred がヨークを併合してイングランドを統一した。しかしその後10世紀に入るとまたまた別口のデーン人が来寇し、たまりかねた彼は亡命、デンマーク王子クヌート Canute がイングランドの王位についた。そのあと2代で後嗣がなく、1042年には再びウェセックス王家の Edward the Confessor が王となる。彼はアングロサクソン系最後の王であることに注意したい。

ノーマンコンケストから懺悔王までがゲルマン系王統であったが、その後王位継承権を主張してノルマンディ公ウィリアムがブリテンに上陸、ヘースチングズの戦いに勝ってウィリアムⅠ世となった。フランス化したスカンディナヴィア系の彼はゲルマン人のブリテン島にケルト系ノルマンディの兵士を率いて乗りこんだ故、血族の不足を補うためにも貴族制度を築き、その命脈を保つためにアングロ・ノルマン体制を維持する工夫をした⁹⁾。これ以後ゲルマン系のアングロサクソンはこの新王家から精神的、文化的な素因を摂取することになった。新王朝はかつて追われたケルト民族文化に郷愁を抱き、アーサー王伝説 Arthurian legend や聖杯物語 Holy Grail を、根拠に乏しい史実をもとにして捏^でち上げた。1180年頃クレチアン・ド・トロワ Chrétien de Troyes はペルスヴァル Perceval を書き、1210年頃ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ Wolfram von Eschenbach がパルツィファル Parzival を書いているが、何れもアーサー王伝説を発展させた大きな物語群となった。ノルマン人の積極性とフランス的美と均整の感覚がアングロ・サクソンの不器用さを補い、新しい気風を醸しだした。彼らは英語を追放してフランス語とラテン語を宮廷用語としたので2世紀にわたり英語は無教養者だけの言葉となった。ヘンリー Henry Ⅰ世の娘 Matilda の子がヘンリーⅡ世となりプランタジネット Plantagenet 家を創始、西フランスのアンジュー Anjou 伯領等を合せて大王国となった。彼は封建的絶対制を敷き、宗教上の裁判権まで奪回しようとして失敗した。次のリチャード Richard Ⅰ世は10年の在位中5

ケ月イングランドに来ただけだが、かえって平安であった。その間アングロサクソンはラテン文化をしっかりと身に付けていた。その上歴代のノルマン王達との力の駆引を経てこの国の二つの文化は融合してゆき、現代英語が次第に醸し出されて来た。14世紀には公共の場や学校においてこの英語がフランス語に代ってきた。かくてブリタニヤと言う合金が固まり始めた。しかしまだスコットランドもウェールズも新生イングランドに対して胸襟を開いてはいなかった。アイルランドは独自の道を辿っていた。

既にキリスト教の感化に浴したアイルランドからケルト族がスコットランドに入植していたが、彼らはアングロサクソンとは境界地方 Borders において度々接触を繰り返し、ついにトゥイード川 The Tweed を境いにスコットランド王国を形成した。10世紀の頃である。スコットランド語による独自の文化圏を維持しながらもアングロサクソンとは少しずつ融和していった。イングランド北部のサクソン王国はエディンバラを中心に7世紀以来小さな文化を保持していた。

スコットランドのジェイムズ James I 世は1603年にイングランドの玉座に就き、更に1世紀後の1707年には法令により両国は連合王国 The United Kingdom of Great Britain を組織した。しかしそれはファジイな結合であり、スコットは古来のケルト精神への自覚を未だに抱きつづけている。

もう一つのケルト人の地ウェールズは13世紀にイングランドのエドワード Edward I 世によって征服されたが、王は彼らに自由な法律を認め皇太子をプリンス・オブ・ウェールズ Prince of Wales と称して彼らとの心の絆を造った。

この様な緩慢な統合はイギリス人の巧みな政治意識からなされたと考えるよりも彼らの雄大で細事にこだわらない大らかな民族性のためであろうと思う。押える時は強力であるが後は放っておくいかにも北方民族らしい気質の現われと見える。それは彼らの近現代の世界政略にも巧まずして表現されている。このイギリス複合国家の統一原理はその後アイルランドの自治への開

放、スコットランド、ウェールズ地方の自立独立の主張と妥協して共存を保つ連邦主義精神となって現代に現われている。この国の歴史的経験はそれぞれの個性尊重と連体の妙味を見せている。

以上イギリスの民族と国家成立の経過について通観して来た。要約すればその構成民族は最初は前2500年頃のスペイン・フランス方面から来た原種新人類と、中央ヨーロッパからの北アルプス系人、即ちケルト人であった。彼らは新石器、青銅器、鉄器を携えてやって来たのであった。言語によって分けるとアイルランド語 Irish、スコットランド語 Scotch、マンクス語 Manx 等のゲールック語系 Goidelic、ウェールズ語 Welsh、古コーンウォール語 Cornish、ブリトン語 Brythonic 等のケルト語 Celtic 系であり民族はそれぞれの言語人種に当てられる。ローマ軍撤退後に入ってきたのがゲルマン語系で現代英語の基となっている。彼らはアングル人、サクソン人、フリース人、ジュート人で彼らが今のイギリス人の基本を構成する。それにデーン人やスカンジナビア人が加わっている。

ブリテン本島中南部に居を占めたアングロサクソン人達がイギリス国のリーダーシップを取って来たが、興味あることは彼らの象徴的存在である王家は必ずしもアングロサクソン系ではない。アルフレッド大王の前後1世紀以外はデーン系、アングロノルマン系、ケルト系の王朝で18世紀になってはじめてゲルマン系のハノーヴァー朝から王が出ている。王家から国民に至るまで総てが自己と伝統を主張しながら妥協の術を見出し、一種の連邦的^{すべ}国家を維持している。この様な国柄から生まれる文化はよそからの文化的影響を被りながらも本来の素性を捨て去ることはない。政治、宗教、文化、思想には他国とは違う独自性がよく現われている。派手とは言えないが迷うことなく能力を発揮し、結局は人類の持つ可能性を力強く表現し、今や世界の全人間に主導的な役割をはたしている。現状では必ずしも政治経済の先頭を切っているとは言えないが、これまでの世界にとって画期的な思想思考は総てこの国から出現していることに思いを致すべきである。¹⁰⁾

文学に息づく民族性

イギリス人の源流アングロサクソン，ジュート，フリースランダー Flieslander の故地は今のドイツ方面，ローマ人によって呼ばれたゲルマニアである。ゲルマニアの紀元前後の事情についてはローマの史家タキトゥスにより具体的に説明されている。前にもふれたが彼はゲルマニーの体質を「巨大で外形が皆同一であり，鋭い空色の眼，黄赤色（ブロンド）の頭髮，長大にして，しかもただ強襲的攻撃にのみ剛強な体軀——つまり労働，作業に対しては体力に相応する忍耐がなく，渴きと暑熱とには少しも耐えられない。ただ寒気と飢餓とには馴化している。」と説明している。また彼らは自らの神々を崇め，メルクリウス Mercurius 神，ゲルマン神話中ではウォーダン Wodan を最も崇拝し，神像は人間の容貌のいかなる形にも似せず，天の神の偉大さを思わせるのである。彼らは森や林を神に捧げ，また神秘なるものにそれぞれ神の名を奉ったと述べている。住居については泉，野，森が心に叶うよう，それぞれ分かれて住んだと記してある。孤立聚落を意味しているのであろう。これらタキトゥスの記録は史家の言として，また彼がミュンヘン近くの生まれらしいと言う立場からもかなり信憑性があると考えてよい。ゲルマン民族は森に囲まれ，森の樹々に心のよすがを求めていたと思われる。その民族がブリテンに移動して来たのである。彼らの心に刷りつけられた詩的心象には当然森の情景が大きく投影されているのではなかろうか。この度は試みに論者の馴んだ文学作品に現われた代表的な森の場面を探索してみたい。

神話，民話その他のテーマについては他日の論に譲るものである。

Shakespeare の森，*As You Like It* より

シェイクスピアの作品に森の印象を求めるならば先ずは *As You Like It*

であろう。

1599年後半から1600年の作と推定される「お気に召すまま」は「夏の夜の夢」「テムペスト」と並んで牧歌的浪漫劇の代表とされている。これ等にはその筋書に一つの共通性がある。即ち現実社会の権威とか束縛から疎外されたり逃亡した人々が“森”，「テムペスト」の場合は“孤島”に入りそこで何らかの靈氣を受け、悩みや苦しみから解脱して再び現実と和合すると言う筋を辿っている。ここでは「お気に召すまま」を主材にこの「森」を探索してみる。

弟フレデリック Frederick に国を追われた兄の公爵 Duke は彼を慕う貴族達と公邸から二十哩以上離れた Arden の森に隠れ住んで不自由ながら浮世離れの高邁な竹林の生活を楽しんでいる。フレデリックの愛娘^{まな}シーリア Celia と従姉妹である兄公爵の娘ロザリンド Rosalind は幼少の頃から睦まじい仲であったため叔父の特別の許しではじめのうちは屋敷にとどめ置かれていた。しかしロザリンドの人柄の良さから我が娘と比べられるのを嫌った叔父から言われなき追放を受ける。シーリアはロザリンドと共に道化のタッチストーン Touchstone を従えて元領主の伯父の住むアーデンの森に脱走する。一方その兄公爵の寵臣サア・ロウランド・デ・ボイス Sir Rowland de Boys の息子なるが故に秀でた能力を弟である現領主に忌み嫌われたオーランドウ Orlando も現公の家臣ル・ボウ Le Beau の親切心から逃亡をすすめられ同じくアーデンの森に忠僕アダム Adam をつれて旅立つ。これら三つのグループと原住民の牧人、農民を加えた人々の間で新たな戸惑いの生活が森の中に生ずるのである。五幕のうち四幕までがアーデンの森を舞台としている。したがってこの森が作品の主役とさえ考えられる。当論は作品の解釈や評価ではなく、作者の創作への衝動、イギリス人観客の感情的共鳴のもう一つの原因を考えたいのである。その様な見地からアーデンの森の意味を考察してみる。

この劇の進行している国はフランスであると一幕一場に明示してある。しかも同じ箇所にも前公爵はアーデンの森で、イギリスのロビン・フッド Robin

Hood の生活をしているとも書いてある。このあたりの場所と時間は矛盾しているがそれを責めるには及ばない。留意する点はアーデンの森とロビン・フッドである。他にテキスト校正上で明らかな間違いが見られる。それはこの作品が何度かにわたって書かれた事によるのであろう。その上この作品の原型は他に幾つかあり、それらを種にして作り上げたものなのである。その第一はトーマス・ロッヂ Thomas Lodge の「ロザリンド或いはユーフェューイズ黄金拾遺」*Rosalynde or Euphues' Golden Legacy* であり、もう一つは14世紀に書かれた902行の「ギャミリン物語」*The Tale of Gamelyn* で、1721年にはじめて印刷された詩である。それらを種本にしたことは明らかになっている。その様な理由から劇構成上の数々の不合理が見出されるが、作品の本質的な問題ではなく、況んや当論においては取り上げる所ではない。重要なことはそれらの原作にあっても追われる王や弟達の落着く先は緑の森であり、そこでロビン・フッドの様な生活を送ったということである。森がこの系列の劇の中で主要な役割をもつことに注目するわけである。

この二幕一場から劇の最後までアーデンの森の場面である。元公爵が貴族達と森の中で語り合っている中に聖書の言葉が引かれている。「アダムが受けた四季の変化という罪」“the penalty of Adam, the seasons' difference,”がその一つでありこのアダムの罪は創世記三章の引用である。追われる迄は常春だったと言う以上に深い意味はない。全編で六箇所これに類似した聖書の断片的な引用が鏤められているが、それは他のギリシャ、ローマの神話から採った片言と共にこの森の宗教的、文学的アクセサリーの役をなしているにすぎない。

トーマス・ロッヂの「ロザリンド」では森はフランスの東北にあるアルダンヌ Ardennes であったがシェイクスピアはこれをイギリスのノッティンガム近くのアーデンの森にしてしまった。しかし彼が最初に書いたときはアルダンヌのつもりであったと思ってよい。即ち次行で Robin Hood of England と言っているからである。

ロザリンドは現領主フレデリック Frederick により十日以内にこの館から二十哩以上離れているよう命ぜられた。二十哩とは32キロメートルであるから大体一国の領地の外、文化の及ばぬ所への追放を意味する。そこは化外の地と見なしてよい。ゲルマン人の故郷のヨーロッパ大陸ならそんな所は人跡未踏の密林を想像出来よう。シェイクスピアはそれを自分の故郷近くのアーデンの森に見立てた。その郷愁が自由の夢を駆りたてののかも知れず、また彼の母方の姓名との一致もいつの間にかフランスからイギリスの森への転換を誘った気配を思わせる。またこの森に活躍したかつての自由人の義賊ロビン・フッドの物語の観客への受けを狙ったのかも知れない。以上の事情から察しただけでもこの森は陰惨な所ではなさそうである。

これをこの作品によって裏打ちして見る。Act I Scene III では叔父に追放された時のロザリンドの不安が次の様に書かれている。

シーリア 伯父上をさがしてアーデンの森へ。

ロザリンド まあ、あたし達には、どんなにか危ないことでしょう。

娘の身空で、そんなにも遠いところに行くなんて！

美しいものは、黄金よりも、賊の心を唆すのですわ。(阿部知二¹¹⁾訳)

この様な不安を抱きつつも二人の娘は顔に泥を塗り、または男装し変名して館から抜け出すのである。しかし伯父であり他方には父である人の住む森に向うことは一つの希望でもあった。科白は次の句で終る。

……さあ、あたしたちは、心満ちたりて、自由に向って進むのだわ。追放¹²⁾にではないわ。

第二幕以後は終幕までアーデンの森の中である。Act II Scene I は冒頭から森の中の公爵の言葉が来る。

公爵 さて、わがさすらいの仲間たち、同胞たちよ。永い習慣のためでもあろうか、この暮しの楽しさこそ色あくだい栄華に立ち勝るではないか。この森こそ、邪悪な宮殿よりも、はるかに危険の少ないものではないか。ここにわれらが感ずるものは、ただ、アダムの受けた四季の移り変りという刑罰のみである。真冬の嵐の、氷の牙や、荒れ狂う怒号が、咬むばかりにわが身の上に吹きつけて、寒さに縮む、その時にすら、わたしは微笑んでいう、
.....

逆境が人に与えるものこそ美しいかな、それは蝦蟆^{がま}にも似て、醜く、毒を含んでこそおれ、
その頭の中には、めでたい宝玉をば匿している。
かくて、俗塵の巷から離れ去ったこのわれらの日々は、
樹々に言葉を聴き、流れゆく水に書物を見出し、
石に教えを感じ、あらゆるものに善を見る。
余は、この生活を変えようとは思わぬ。¹³⁾

冬の嵐のこの情景は単なる言葉の上の修飾以上にアングロサクソンが太古の大陸時代にその先祖達が体験して来た自然の厳しさや自然への思慕を深く観賞者の膚に感じさせる効果をもっている。この冬の心象の表現法は北方人種の体験的なものであろう。自然は人に何かを感じさせる。人は木々からも心の反応を引き出す。自然界を心あるものと感ずるのである。

領主フレデリックとオーランドウの兄オリヴァの追跡を逃れ、老忠僕と共にアーデンの森に逃亡中のオーランドウ Orlando は Act II, Scene VII の科白で次の如く言う。

オーランドウ ……もしこのものすごい森に、何か野獣のたぐいでもおれば、ぼくがその餌食になるか、それとも獲ってきてお前に食わせてやるかだ。お前は、力が尽きたんでなく、気持だけで死にかかっているんだぞ。ぼくのためにも、気に張りを持って、死神をもうすこし突っ放しておけよ。すぐこのお前のところに帰ってくるがな、何か食物を持ってこなかったら、そのときは、死んでゆく許しをやる。だが、帰ってこないうちに死んだならば、ぼくの骨折りをあざ笑ったことになるぞ。……よし、どこか物蔭にかついで行ってやるぞ。そして、この荒れはてたところに、何か生物でもいる以上は、お前を食う物がなくて死なせはせぬ。元気を出せ、アダム爺¹⁴⁾よ。

森をよすがに生きる民族のたくましい気概を感じる所である。これは実際に耐えぬいて来た彼らの生活を近代文化の場に引きずり出してそれに相応しい体裁を盛り、厳しい狩猟生活を率直に表出している所である。生きるべき現実を言葉の綾などではなく猛然と自然に猪突する気構えをもって述べている。

続く第七場も森の中。この追われた公爵とその一党の森と共存の生活ぶりはうらやましい位である。オビッド Ovid の変形譚流の面目躍如たるものがある。全体に季節感は曖昧だが晩秋の候らしい。当作品の問題男ジェイクイズ Jaques と公爵の地口のやり取りの中に飛び込んで来る公の旧臣の息子オーランドウと旧忠僕アダム、さすが森の女神もすっかり毒気を抜かれる天真爛漫抱腹絶倒の山場である。森の哲人ジェイクイズの口からほとぼしる自然と人生の評論は本文を直接読む他ない。彼らの喧噪振りは今やアーデンの森の冷酷さを蹴散らした感がある。

森の中であるからこそ森の遠^おち近^こちで四組の恋の物語りは進んでゆく。この森は魂を持っているが物言わぬ巧みな進行係りと言える。その一組は宮廷から逃れて来た道化タッチストーン Touchstone と森の百姓娘オードリ Au-

drey の恋であるがこの娘，神々のお蔭で醜く生まれている。しかも結婚の時は隣村の牧師オリヴァ・マーテクスト様をお願いしようとしている。martext とは「話を台なしに損う」という意味である。またここには教会などなく，森と角の生えた獣がいるだけである。キリスト教の入りこむ場所柄でもない。Act Ⅲ Scene Ⅲで，

オードリ あたい，阿婆摺じゃないよ。神さまのおかげでみっともない生まれつきだがね。

タッチストーン お前を醜くつくられた神々をたたえよ，か！ そのうちおいおいに，阿婆摺にもなるだろう。だが，まあ，それはそうとして，お前と結婚することにしよう。で，そのために，隣村の牧師さんの，オリヴァ・マーテクスト先生に会ってきたんだ。森のこのところで落ちあ¹⁵⁾って，おれたちを夫婦にしてくれるっていったんだがなあ。

と言う次第でこの牧師に式を頼む。所がそこに居合せたばかりに二人の身元譲渡人を買って出たジェイクイズに次の忠告を受ける。

ジェイクイズ ……この先生は，羽目板をつなぎあわせるみたいに，君たちをくつつけるだけさ。すると君たちのどっちかの正体が，反り返った板だってことになって，生木みたいに，曲って曲ってしようがな¹⁶⁾くなるぞ。

と言うわけでこの牧師を断ることになる。そして次の科白に続く。これは当時流行のバラッドである。

タッチストウン さあ，かわいいオードリ。結婚しなくちゃなるまいよ。さもないと，野合の暮しだから。

さよなら、オリヴァ殿、——

おお、いとしのオリヴァ！

おお、すばらしのオリヴァ！

見捨てないでくださいな。

じゃなくて——

失せておしまい

行っておしまい

あんたに頼んで式はせぬ。¹⁷⁾

タッチストウンの恋の場面の上述の科白で注意すべきは gods である。明らかにキリスト教の神ではない。特定出来る神ではないが運命の神か森に住みつく八百万神の様なものを意味している。アングロサクソン人がゲルマン時代から馴染んでいた自然神が咄嗟の場合に口をついて出てきたのである。Act V Scene I で田舎の青年ウィリアム William がタッチストウンに出会った所でまたこの様な神が彼の口から出る。

ウィリアム 二十五になりますだ。

タッチストウン 年頃だな。名はウィリアムだったね。

ウィリアム ウィリアムですだ。

タッチストウン いい名だ。この森の中で生まれたんだね。

ウィリアム はあ、神さまのおかげですだ。

タッチストウン 「神さまのおかげ」か。いい返答だ。金持かね。

ウィリアム さあ、ほどほどだ。¹⁸⁾

五幕三場の侍童の春の歌の終りに来るタッチストウンの科白。

タッチストウン いや、やっぱりそうだ。つまりこんな馬鹿な唄をきく

のが、間抜け調子の話なんだ。あばよ、神さまに声をなおしてもらう
んだね。さあおいで、オードリ¹⁹⁾。

以上の二箇所の神も大文字の God であるが森の神である。作中にはギリシャ神話の神もいくつか出るがその場合は名前がついている。Thank God. にせよ God mend your voices! にせよそれは身近に居る神であり、北欧時代から民族と共に来た神である。エリザベス I 世の頃はイギリスはキリスト教派内に混乱の続いていた頃でもあり教義上の神の概念が一般にどの程度固定していたかはわからない。事ある時さし当り使われたのがゲルマン時代からの民族神だったのであろう。上の科白に続いてタッチストウンの口から「異教の哲人」The heathen philosopher なる言葉が出ていることがそれを裏付けていよう。

この森には神々の他に様々な生き物の心^{イメジャリー}象が隠顕している。Act II では毒と宝石をもつ蝦蟆 toad, 斑毛の馬鹿 dappled fools, 即ち鹿, 牡鹿 stag, 牛 cow, 羊 flocks, 狒々 dog-apes, 小鳥 birds, 鼬 weasel, 雄鶏 chanticleer, 蝸牛 snail, 豹 pard, 鶏 capon, Act III, 羊 sheep, ewes, rams, 猫 civet, cat, 羊 ewes, mutton, 牡鹿 hart, 牝鹿 hind, 猫 cat, 鼠 Irish rat, 小鹿 heart, 兎 cony, 山羊 goats, 鹿 deer, 雄牛 ox, 馬 horse, 鷹 falcon, 鳩 pigeons, 鵞鳥 goose, 羊 flock, Act IV, 蝸牛 snail, 蠅 fly, 雄鳩 cock-pigeon, 雌鳩 hen, 鸚鵡 parrot, 類人猿 ape, 猿 monkey, 鳥 bird, 鹿 deer, 不死鳥 phoenix, 蛇 green and gilded snake, 牡獅子 Lioness, Act V, 獅子 Lion, 牡羊 rams, アイルランド狼 Irish wolves, 小鳥 birds, 隠れ馬 stalking-horse 等々である。それが時には繰り返されるので森の中は結構生き物で賑わっている。ここで気になるのは Act IV Scene II のジェイクイズの科白である。

ジェイクイズ その人（その鹿を斃した人）を、ローマの勇士のように、
公爵にお目見えさせよう。勝利の枝のかわりに、鹿の角を頭にのっけ

るといいね。猟師、こういった時にふさわしい唄はないか。
森人 あります。

.....

唄

森人 鹿を獲った者には、何をやろ。
鹿の皮きせて、鹿の角かぶらせよう。
それから囃²⁰⁾して帰ろ。

この唄には曲も残っているが古い民謡である。古い時代の鹿狩の風習として当時面白がられていた。ところで民族学の書によると紀元2世紀末以後西ゲルマン人達が北に移動しはじめているが、彼らも、またその頃のケルト人同様狩猟や祈りの場合狼や鹿、熊などの頭を切り、それを頭の上に被る習慣があった。この様な荒々しい伝統は明らかに北方系のアングロサクソンが受け継いできたものである。文字のない頃の文化は慣習、言い伝え、唄や囃しによっても意外に残される故その採集は民俗学 Folklore にとって重要課題である。そしてこの作中にも古歌の引用が多い。

森が使われるシェイクスピアの作品には常に超自然力、魔力、幻影が作用している。この作品はその幸福の力の方を表わしている。Act V Scene IIでロザリンドのオーランドウに向けた告白を聞く。

ロザリンド ……自分の名誉になることじゃないが、君のおためになることをしたいばかりに、なにほどにもあれ、ちょっと信じてもらいたいことがある、という以上には、尊敬を受けたいなどと思っているのでもありません。で、なろうことなら、このほくに不思議な力がある、と信じてください。三つのときから、ある魔法使の導きを受けたのです。その術は非常に奥深いものだったが、けっして地獄の術ではなかった。……

オーランドウ 真面目で話しているのですか。

ロザリンド 生命にかけて、そうです。魔法使だとはいいましたが、生命²¹⁾は大切にしているのです。……

更に Act V Scene IV に次の科白。

オーランドウ 殿。私も彼をはじめてみとめましたとき、姫君の御兄弟かと思つたのでした。しかしながら殿、この少年は森に生まれて、その伯父なるもののもとでみちびかれ、恐ろしい術のかずかずの手ほどきされたとか、その伯父とは、この森のなかに隠れて棲む、名²²⁾だたる魔法使であるとか、申しております。

ロザリンドの変身した少年に気付かぬオーランドウは現在の不可解な状況を魔術によるものと思っている。そして更に有力な魔法使いの存在を信じているが、それは Scene IV 150 行のジェイクイズ・デ・ボイスの科白の中の「さて、この荒涼たる森のほとりまで（フレデリック公が）こられましたとき、一人の年老いた隠者とお会いなされまして、……悔いあらためて、その企みのみかは、世をも捨てる心となられました。……」という條^{くだ}りの隠者 old religious man と同一人物なのである。実は追放されている前公爵その人である。彼の魔術は森の魔力の別の表現である。イギリスの人々がアーデンの森から思い起す懐かしさを示すと共に劇中の筋書の錯綜を一気に解決し目出度い大団円を迎えることになるのである。

これと類似の森は1594年作の「夏の夜の夢」*A Midsummer-Night's Dream* でも主要な背景となっており、シェイクスピアの子供時代の森の風景と、そこに繰り広げられるゲルマン系民話を基にした妖精物語りが作品に陽気な気分を醸しだしている。この森の場合もその魔術的性格が人々の幸福と融和に

力を発揮している。1611年作の「テムペスト」*The Tempest* の島にも同じ魔力の支配する森があることが想起される。

Macbeth の森

1623年の Folio 版で初めて上梓されているが、実は1603年から6年までに何度か上演されていた記録もある。また D. Wilson の考証によれば「ハムレット」*Hamlet* にすぐ続いて1601～2年頃には出来あがっていたとも考えられている。それは二者の性格上の対称性や類似性などから推理されたのである。この点については確定的なことは証明されてはいない。ただ1603年にスコットランド王がジェームズ James I 世となってイギリスに君臨しスチュアート王家を築いたこと、1606年に兄弟格のデンマーク王クリスチャンが訪英した時の宮中観劇の出し物となったことなどから内容とその政治的背景を考え合わせてみると色々興味ある問題が出てくる。

話の筋は単純で、將軍マクベスがダンカン王の信頼に反き、夫人の励ましを得た上、何度かに及ぶ魔女の囁かしに乗って王を自分の居城に招き刺殺する。証拠湮滅を図るが、諸公將軍達に見破られて攻撃を受け、夫妻共に滅される結果となる。

本稿の主意は作品の中の民族的、ここではゲルマン民族的要素を作品中に見出すことである。例えば「ハムレット」はデンマークのエルシノア城が舞台であり、「マクベス」の上演はデンマーク王歓迎のためでもあったことからアングロサクソンの懐郷の気持が当時の観衆にもあったのではないかと思われる。作家は受けを狙うからである。

前項を受けて当作品における有名なダンシネイン Dunsinane の丘近いバーナム Birnam の森を中心にその意味を考えてみる。Act IV Scene I 90行の科白は次の通りである。

第三の幻影

……マクベスは決して敗れるということはないぞ。

大きなバーナムの森が高いダンシネインの山の方へ

マクベス目がけて攻めかからない限りは。

マクベス そんなことがあるもんか。

誰に森の召集ができるか。大地にへばりついた根っこを

放せと木に命令ができるか。ありがたい預言だ。よし。

叛逆の首、バーナムの森が立ち上るまでは立ち上るな。

……………²³⁾ (野上豊一郎訳)

ここでは三人の妖女 Witches の他に三人の幻影 Apparitions が現われていて、これはその幻影の予言である。

Act V Scene IV はダンカン王の息子マルカム Malcolm や老シュワード old Siward 達の進軍の場面。軍はダンシネイン城に攻撃をかける前に兵士に一枝ずつバーナムの森から取った枝を持たせる。

シュeward 向ふに見える森は何だ。

メンティース バーナムの森。

マルカム 各兵士に一枝ずつ切り取らせ、それをめいめいの前にかざして持たせよう。

それでこちらは味方の兵力を隠し、敵の偵察に報告を

誤らせることになるだらう。²⁴⁾

続いて Act V Scene V で、

使者 私が山の上で見張りに立っております、

バーナムの方を見ますと、見るが否や、何だか、

森が動き出したように思いました。

.....

ものの三マイルとないところをやって来るのが御覧になれます。

動いて来る森でございます。

マクベス

そして、どうやら、

悪魔が真実めかして嘘をついた二枚舌が気になり出した。

「心配するな、バーナムの森がダンシネインへ来ぬうちは」と言った。

——それに今こそ森は

ダンシネインへやって来る。——武器だ。武器だ。打って出る。——²⁵⁾

次の六場の初めの所でマルカムは兵士に、持っていた葉付の枝を投げ捨てさせる。マクベスの幻影のバーナムの森は忽然と消滅する。

ダンシネインの丘は Perth の附近である。スコットランドであるから風雪の烈しい陰鬱な地方であり、アーデンの森と比べれば悲劇の地としては相応しい。したがってこのバーナムの森の生^{いきりよう}霊にはウィッチが当てられるのは自然である。マクベスはこのウィッチの悪霊にとり憑かれたことになる。三人の妖女^{ウィッチ}はこの森にかかわる動物達の魔性の権化とも受け取れる。Act I Scene III の 9 行で第一の妖女 First Witch の科白に「尾なし鼠に化けて」‘like a rat without a tail’と言う句があり、更に Act IV Scene I ではこの妖女達の歌にあらゆるものの怪^けが溶け込んでいる。

第一場——暗い洞穴。中ほどに煮え沸る大釜

かみなり。三人の妖女登場。

第一の妖女 三べん鳴いたぞ、ぶち猫が。

第二の妖女 三べんと一ぺん、はりねずみ。

第三の妖女 ハーピヤも鳴いている。——

もう、よし。もう、よし。

第一の妖女 釜の周りを輪にかいて、

毒の臓物投げ込もう。

冷たい石の下にいて、

三十一日、夜昼を、

眠って流した毒の墓、

お前を初めに煮てやろう。

三人の妖女 骨折苦勞を倍にして、

釜も沸き立て、火も燃えろ。

第二の妖女 田沼の蛇のヒレ肉も、

煮えたり、焼けたり、釜の中。

蛙の指に、^{いもり}蟾蜍の目、

^{こうもり}蝙蝠の毛に、犬の舌、

^{まむし}蝮蛇の叉舌、^{むし}盲蛇の針、

^{とかげ}蜥蜴の足に、^{ずく}角鴮の羽、

ひどい難儀のまじないに、

地獄の吸物みたいに煮えろ

三人の妖女 骨折苦勞を倍にして、

釜も沸き立て、火も燃えろ。

第三の妖女 竜の鱗に狼の齒、

魔法づかいの女の本乃伊に、

^{さめ}鮫の胃袋、腹ぶくろ、

暗夜に掘った毒にんじん、

神を罵るユダヤの肝に、

山羊の^{たんのう}胆嚢、月蝕に

折り取る^{いちい}櫟の木の小枝、

トルコ人の鼻、^{だつたん}韃靼人の唇、

じごくが溝に産み落し
絞めた赤兒の小指まで、
粥をどんみり濃くしろ。
も一つおまけに虎の腹綿、
釜の種物にしてやろう。
三人の妖女 骨折苦勞を倍にして、
釜も沸き立て、火も燃えろ。
第二の妖女 狒狒の生血で、さあ冷ませ、
それでまじないざっとすんだ。²⁶⁾

これ等の妖女達は森の靈の権化と看做される以上彼女の素性を述べてみる。
このウィッチはスカンディナヴィア神話で言うノルン達 Nornae と一致する。そしてノルンも三人の組を作り、その第一のウィッチはウルダ Urda—the Past, 第二はヴェルダンディ Verdandi—the Present, 第三はスクルダ Skulda—the Future とされている。この劇でも Act I Scene III で最初彼女達の出現の時がその順を追っている。第一の妖女がマクベスを見てグラームズ領主 Glamis と呼び、次がコーダ領主 Cawdor と呼び、第三のが行く末王になる人 that shalt be king hereafter と呼び掛けている。過去、現在、未来の順である。神話ではウィッチ達の頭領ヴァルキュリー Woelcyrrie が運命を支配すると考えられている。ノルウェー語の valkyrie である。彼女達はアングロサクソン語の wyrd, 低地ドイツ語の wurd の名をもち泉のほとりに棲んで、イグドラジール Ygdrasil (オーディンの馬) と言う名の^{トネリコ}秦皮の大木 (世界樹) が枯れない様に泉の水をそれに灌いでいる。そして万物の運命を支配しているのである。この作中に現われて三人の妖女を指図するもう一人の魔女ヘカティ Hecate は実はギリシャ神話の運命神であるが、それが北欧神話のヴァルキュリーに代ってここに用いられている。恐らくこの作品に^{ディレクティブイズム}今 様を与えるための技巧であろう。ハーピヤもギリシャ神話の女面鳥身の怪鳥で

ヘカティにともなうものである。

三妖女の支えるイグドラジールがバーナムの森に当たると考えられ、したがってこの森の世界の中にマクベス劇が操^{あやつ}られてゆくわけでその故にこそ運命劇であると言う見方が成り立つのである。

シェイクスピアの業績はあらゆる面からみて人類の果した偉業の一つと見てよい。ヨーロッパに拡がったそれまでの文化を忌憚なく取り込み、イギリス人の民俗性を主張しつつ彼の言語的鬼才^{ふる}を揮って幾多の作品を創りあげている。彼の作品を吟味することはイギリス文化を理解することになるというのは決して間違いではない。かつては一時期と言えどもローマ帝国に支配され、許多の文化、宗教の流入を経ても尚キリスト教、ローマ、ギリシャの文化以前の宗教、民族の伝統、習慣が依然としてこの国民の中に息づいている。それは1万年以上にわたり営々として文化を築いて来た人間と民族の誇りである。この力強いイギリス国民の血液の持つ生命力はシェイクスピア以後にも発揚されているのではないかと言う事を次の問題としたい。そして先史時代の文化は文字がなかったにも拘わらず世界に広く浸透し、その後のそれぞれの文化の基礎の部分となして現在に及んでいるのではないかと言う事を考えて行くつもりである。

注

- 1) 亜人間 現在は人間の亜種と考えられている。日本では旧人とも呼ばれている。
- 2) ムステリアン文化 ネアンデルタール人の文化。
- 3) オーリニャシアン文化 クロマニヨン人の文化、洞窟画あり。
- 4) ウル バビロニアの古都。ここの厚さ8メートルの粘土層はノアの大洪水の証拠とされている。
- 5) ウルク 古代バビロニアの都市。旧約聖書のエレク Erech。現代の Warka。アヌのジググラト（白神殿）は有名。

- 6) フロズニー『世界の歴史Ⅰ』325頁，中公文庫
- 7) ベルクマン法則，同種動物間では寒冷地のものの方が大きい。
アレン法則 同種間では寒冷地のものが身体突出部が短小。耳介，下肢，尾。
グローガ法則 高温多湿帯のものほど皮膚色素沈着大。
トムソンーバクストン法則 高温多湿地の人種ほど鼻が平たく低い。『人類ホモサピエンスへの道』215頁，NHKブックス。
- 8) 中世英語による文学系列を主として指す。12，3世紀のアングロ・ノルマン文学で，アーサー王物語を含む。
- 9) ノルマン貴族はノルマンディのケルト人との結婚を奨励していた。
- 10) 引力の発見，進化論，ユートピア思想等。

- 11) Act I Scene III l. 102.

ROSALIND. Why, whither shall we go?

CELIA. To seek my uncle in the forest of Arden.

ROSALIND. Alas, what danger will it be to us, Maids as we are, to travel
forth so far!

105

Beauty provoketh thieves sooner than gold.

- 12) *Ibid.*, l. 132.

To hide us from pursuit that will be made

After my flight. Now go in we content,

To liberty, and not to banishment.

[*Exeunt*]

- 13) Act II Scene I

DUKE SENIOR. Now, my co-mates and brothers in exile,

Hath not old custom made this life more sweet.

Than that of painted pomp? Are not these woods

More free from peril than the envious court?

Here feel we not the penalty of Adam.

5

The seasons' difference, —as the icy fang

And churlish chiding of the winter's wind,

Which when it bites and blows upon my body,

Even till I shrink with cold, I smile, and say,

.....
 Which, like the toad, ugly and venomous,
 Wears yet a precious jewel in his head:
 And this our life, exempt from public haunt,
 Finds tongues in trees, books in the running brooks,
 Sermons in stones and good in every thing.

15

AMIENS. I would not change it.

14) Act II Scene VI l. 6.

If this uncouth forest yield any thing savage, I will either be food for it, or bring it for food to thee. Thy conceit is nearer death than thy powers. For my sake be comfortable; hold death awhile at the arm's end: I will here be with thee presently; and if I bring thee not something to eat, I will give thee leave to die: but if thou diest before I come, thou art a mocker of my labour.

....

.....

....come, I will bear thee to some shelter; and thou shalt not die for lack of a dinner, if there live any thing in this desert. Cheerly, good Adam!

16

15) Act III Scene III l. 32.

AUDREY. I am not a slut, though I thank the gods I am foul. 33

TOUCHSTONE. Well, prais'd be the gods for thy foulness! sluttishness may come hereafter. But be it as it may be, I will marry thee, and to that end I have been with Sir Oliver Martext, the vicar of the next village, who hath promis'd to meet me in this place of the forest and to couple us.

16) *Ibid.*, l. 76.

this fellow will but join you together as they join wainscot; then one of you will prove a shrunk panel, and like green timber warp, warp. 78

17) *Ibid.*, l. 84.

TOUCHSTONE. Come, sweet Audrey:

Farewell, good Master Oliver; not,—

85

O sweet Oliver,

O brave Oliver,
Leave me not behind thee;
but,—

Wind away, 90
Be gone, I say,
I will not to wedding with thee.

18) Act V Scene I l. 19.

WILLIAM. Five and twenty, sir.

TOUCHSTONE. A ripe age. Is thy name William? 20

WILLIAM. William, sir.

TOUCHSTONE. A fair name. Wast born i'the forest here?

WILLIAM. Ay, sir, I thank God.

TOUCHSTONE. 'Thank God' ___ a good answer. Art rich?

WILLIAM. Faith, sir, so so. 25

19) *Ibid.*, Scene III l. 38.

TOUCHSTONE. By my troth, yes; I count it but time lost to hear such a foolish song. God be wi' you; and God mend your voices! —Come, Audrey.

[*Exeunt*]

20) Act IV Scene II l. 3.

JAQUES. Let's present him to the Duke, like a Roman conqueror; and it would do well to set the deer's horns upon his head, for a branch of victory. —Have you no song, forester, for this purpose? 6

FORESTER. Yes, sir.

.....

SONG

FORESTER. What shall he have that kill'd the deer? 10

His leather skin, and horns to wear.

Then sing him home:

21) Act V Scene II l. 51.

ROSALIND.

.....neither do I labour for a greater esteem than may in some little measure draw a belief from you, to do yourself good and not to grace me. Belive, then, if you please, that I can do strange things: I have, since I was three year old, convers'd with a magician, most profound in his art and yet not damnable.

.....

ORLANDO. Speak'st thou in sober meanings?

ROSALIND. By my life, I do; which I tender dearly, though I say I am a magician.

.....

22) *Ibid.*, Scene IV 1. 28.

ORLANDO. My lord, the first time that I ever saw him
Methought he was a brother to your daughter:

But, my good lord, this boy is forest-born, 30

And hath been tutor'd in the rudiments

Of many desperate studies by his uncle,

Whom he reports to be a great magician,

Obscured in the circle of this forest. 34

23) *Mac.* Act IV Scene I 1. 90.

Macbeth shall never vanquish'd be until

Great Birnam wood to high Dunsinane hill

Shall come against him. [*Descends.*

Macb. That will never be:

Who can impress the forest, bid the tree 95

Unfix his earth-bound root? Sweet bodements!

good!

Rebellion's head, rise never till the wood

Of Birnam rise,

24) *Act V* Scene IV 1. 3.

Siw. What wood is this before us?

Ment. The wood of Birnam.

Mal. Let every soldier hew him down a bough
And bear't before him: thereby shall we shadow
The numbers of our host and make discovery
Err in report of us.

25) Act V Scene V l. 34.

Mess. As I did stand my watch upon the hill,
I look'd toward Birnam, and anon, methought,
The wood began to move.

.....

Within this three mile may you see it coming;
I say, a moving grove.

.....

.....and begin
To doubt the equivocation of the fiend
That lies like truth: 'Fear not, till Birnam
wood

Do come to Dunsinane': and now a wood
Comes toward Dunsinane. Arm, arm, and out!

45

26) Act IV Scene I l. 1.

Thunder

Enter the three Witches

FIRST WITCH

Thrice the brinded cat hath mewed.

SECOND WITCH

Thrice, and once the hedge-pig whined.

THIRD WITCH

Harpier cries—'tis time, 'tis time.

FIRST WITCH

Round about the cauldron go—

In the poisoned entrails throw.
Toad, that under cold stone.
Days and nights has thirty-one,
Sweltered venom sleeping got:
Boil thou first i'th' charmèd pot.

ALL

Double, double, toil and trouble,
Fire burn and cauldron bubble.

SECOND WITCH

Fillet of a fenny snake
In the cauldron boil and bake;
Eye of newt, and toe of frog,
Wool of bat, and tongue of dog;
Adder's fork, and blind-worm's sting,
Lizard's leg, and howlet's wing:
For a charm of powerful trouble,
Like a hell-broth, boil and bubble.

ALL

Double, double, toil and trouble,
Fire burn and cauldron bubble.

THIRD WITCH

Scale of dragon, tooth of wolf,
Witch's mummy, maw and gulf
Of the ravined salt-sea shark;
Root of hemlock, digged i'th' dark;
Liver of blaspheming Jew,
Gall of goat, and slips of yew
Slivered in the moon's eclipse;
Nose of Turk, and Tartar's lips;
Finger of birth-strangled babe

Ditch-delivered by a drab:
Make the gruel thick and slab;
Add thereto a tiger's chawdron,
For th' ingredience of our cauldron.

ALL

Double, double, toil and trouble,
Fire burn and cauldron bubble.

SECOND WITCH

Cool it with a baboon's blood,
Then the charm is firm and good.

〔参考文献〕

- 『人類 ホモ・サピエンスへの道』江原昭善著，1989年版，日本放送出版協会。
- 『蛮族の侵入——ゲルマン大移動時代——』ピエール・リシェ著，久野浩訳，1989年版，白水社。
- 『ゲルマン，ケルトの神話』トンヌラ著，清水茂訳，1989年版，みすず書房。
- 『ケルト人』G. ヘルム著，関楠生訳，1990年版，河出書房新社。
- 『ケルト人の世界』T.G.E.パウエル著，笹田公明訳，1990年版，東京書籍。
- 『ゲルマニア』タキトゥス著，泉井久之助訳，1991年版，岩波文庫。
- 『歴史』ヘロドトス著，松平千秋訳，1989年版，岩波文庫。
- 『ベーオウルフ』忍足欣四郎訳，岩波文庫。
- Living World History*, T. W. Wallbank.
- 『世界の歴史』1989年版，中公文庫。
- The Making of Mankind*, R. E. Leakey, 1981, BBC.
- 『人類の誕生』C. アランブール，寺田和夫訳，1982年版，文庫クセジュ，白水社。
- A Concise History of England*, F. E. Halliday, 1964, Thames & Hudson Ltd. London.
- Ancient Britain*, J. Dyer, 1990, A Batsford Book.
- 『大英国』L. カザミヤン著，手塚りり子訳，1986年，白水社。

- 『文明の誕生』江坂輝彌著，1989，講談社。
- 『エッダとサガ』谷口幸男著，1988，新潮社。
- 『北方民族文化誌』オラウス・マグヌス著，谷口幸男訳，1991年，溪水社。
- 『古代伝説と文学』土居光知著，1960年，岩波書店。
- 『文学の伝統と交流』土井光知著，1964年，岩波書店。
- 『英独比較語学』古川尚雄著，1991年，広島文教女子大英文学会，溪水社。
- 『西洋史地図』村川堅固著，1933年版，宝文館。
- 『転身物語』オヴィデウス著，田中秀央訳，1966年，人文書院。
- Shakespeare's England*, 1966, Oxford Univ. Press.
- 『イギリス文学史』平井正穂著，1981年，明治書院。
- Macbeth*, 1964, The Arden Shakespeare.
- As You Like It*, 1964, T. A. Shakespeare.
- Macbeth*, 1963, A. New Variorum Edition.
- Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, 1973, R. & Kegan Paul Ltd.
- 『お気に召すまま』阿部知二訳，岩波文庫。
- 『マクベス』野上豊一郎訳，岩波文庫。
- 『夏の夜の夢』土居光知訳，岩波文庫。
- The Pagan Religions of the Ancient British Isles, Their Nature & Legacy*, 1991, by R. B. Hutton, Black-well, Oxford.
- The English Village, The Origin & Decay of its Community*, by Harold Peake, 1978, AMS.